
クラスに異種族が普通にいたらどうなるかに関しての一考察

ペタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラスに異種族が普通にいたらどうなるかに関しての一考察

【Nコード】

N1482BA

【作者名】

ペタ

【あらすじ】

学園ものとファンタジーの2つの王道ジャンルを少しミックスしてみました。

配合比率は学園8、ファンタジー2という感じです。

一見ただのラブコメっぽいですが、じつはそうでもなかったりします。

主人公の相馬は放課後に突然告白される。それは普通とは少し変わ

った学校での、とってもかわいけど少し特殊な女の子からだった。
・・。 高校生活の中で、人類とは異なる種族との交流や対立を通して、主人公が少しずつ変わっていく、そんなストーリーです。

その1

第1章 見えない壁

0

「私と付き合ってくれ！」

大きな声だった。それは教室の空気が止まるほどに。

六時間目の授業が終わり、短いホームルームを終え、皆が、さあ、これから帰宅だ、部活だ、買い物だ、町の徘徊だ、という時だった。ホームルームを終え教室から出て行こうとした担任も、教卓から五歩、あと二歩で出入り口の戸に手が届くというところまできて、右足が前に左足が後ろに、右手を戸に向かって伸ばしていたその姿勢のまま固まっていた。

3

声を上げた少女は、今まさに俺の前に立っている。かなり小柄なその背丈は俺の胸ほどしかなく、大きな目と強い輝きを放つ瞳が俺を見つめている。

教室にあるすべての意識が、俺と少女の成り行きの見守りモードに入ったようだ。ざわざわしていた教室が静まり返っている。この都会にこんな静かな所があったとは知らなかった。学校が終わり速攻で教室から飛び出そうとしていた奴らも、とっとと帰ればいいのに、わざわざ歩みを止め、振り返り、教室で今まさに起こっている事象に注目している。

全生徒四三名、プラス担任一名、マイナス当事者の俺と少女の計

四二名、かける二の瞳が、教室の窓側の一番後ろの俺の席、ただその一点をのみ見つめていた。

なぜ、こういう事態になったのかは分からない。だが、振り返って考えてみると兆しらしいものはあった。話は二時間ほど前の昼休みに遡る……。

1

「相馬くん。お食事中にごめんなさい。今度の体育祭のことで、ちよっと、いいかな」

俺はがつついていた弁当箱から、視線を上に移した。そこにはクラスの子、早乙女奈緒が、少し緊張した面持ちで、目線を少し下に落としながら、それでもがんばって話かけましたといった感じで立っていた。

4

「別にかまわないが、なに？」

早乙女は少しほっとしたような表情を浮かべた。

「ごめんね。やっぱり食事中は迷惑よね。あとでもいいんだけど……」

早乙女は少し作り笑いを浮かべながら、相変わらずおどおどした様子だった。

早乙女は女子としてはやや背が高く、髪は背中まである長い黒髪を後ろで結んでいた。色白で眼鏡をかけていて、成績もいい。それでいて学級委員長もやっている。いや、これは正確には押しつけられたといってもいいかもしれない。優等生という言葉を辞書で引い

たら、例示として示されそうな女子である。

頼まれると断れない性格のようで、学級委員長に加え、生徒会、そして体育祭実行委員までも押しつけられていた。ちなみに学級の副委員長は委員長の指名で決まる。早乙女が指名したのは俺だった。数少ない同じ中学校出身の知り合いだからという理由で。だから俺はこのクラスの学級副委員長という立場のようである。しかし、そのどうでもいい役職にふさわしく、特に何かしたという記憶もない。

「だから、別に構わないと言っている。要件は？」

俺の言葉に早乙女の作り笑いは消えた。そしてこのまま話を続けるか迷っている様子だったが、意を決したように話を始めた。

「実は、昨日、体育祭の実行委員会があつたんだけど、今年も異種混合のリレー大会が行われることになったの。それで……、クラスの他の実行委員がぜひ、私たちの代表として相馬くんに出てもらいたいということになって……。その……、うちのクラスじゃ相馬くんくらいしか他のチームと対抗できる人がいないというか……。私は相馬くんは他にもいろいろ忙しいし、むりだよっていったんだけど、他の人がどうしてもって……。」

相変わらずのもしもじぶりである。早乙女はいつもの緊張した時の癖で、制服の裾をつかんでいる。俺は少しいらついてきた。

「だったら、その他の人っていう奴らが頼みに来ればいいじゃないか。なんでお前が来るんだ」

俺の言葉に早乙女が泣きそうな顔になった。

「ごめんなさい。相馬くんと話をしたことがあるのって、クラスの体育祭実行委員の中には私しかいなくて、それでどうしてもってみんなが……。」

俺はクラスの中で、いい言い方をすれば周りから一目置かれてい
る、悪い言い方をすれば浮いている、そんな存在だった。男子生徒
も俺に話しかけるときはなぜかおどおどしている奴が多い。

「分かった。別にリレーくらい出てやる。それでいいんだな」

早乙女の顔が笑顔に変わった。

「本当に、いいの？ 迷惑じゃない？」

「だから出るって言っているだろう」

俺の口調は少し強くなってしまった。とたんに早乙女は泣きそ
うな顔になる。

「ごめんね。相馬くん」

俺はこの早乙女が嫌いではない。それなりに有能で一生涯懸命な所
もあるが、それ以上に早乙女の周りの空気が俺にとっては心地良か
った。そうでなければ、まともに相手などしない。

俺は早乙女から目を放し、再び食べかけの弁当箱に意識を移した。
早乙女もそれを話の終了と受け取ったのだろう、大きく一礼すると、
すくすく離れていった。

弁当箱には隅の方に漬物が残っていた。漬物事情には詳しくない
ので、紫色のその漬物がもとも何の野菜かも分からず、積極的に
食べたいとも思わなかった。しかし、毎日弁当を作ってくれている
おばさんの手前残すわけにもいかず、まとめて箸でつかんで、一気
に口の中に放り込んだ。甘いとも酸っぱいとも形容しがたい独特の
風味が口の中に広がる。決してうまいものとは思えない。そもそも
漬物などという食べ物、昔、野菜の生産時期が固定しており、そ
して長く保存できないという事情によって保存食として作られたも
ので、一年中どこかしらで野菜が取れる現代には必要のない食べ物

なのではないかと思う。

俺は目の前に人の気配を感じた。先程早乙女が立っていた位置に、今度は別の女子が立っていた。

「さっきのナオとのやり取りは、優しくないんじゃないか」

俺は視線を上げた。その女子は立ってはいたが、一五〇センチを少し切るんじゃないかという小柄さゆえに、長身の俺が座っただけもほとんど同じ目線の高さだった。

「ナオって、早乙女のことか？ そんなことはないだろう。ちゃんと頼みを聞いてやったじゃないか」

すると相手は、大きな緑色の瞳に軽い怒気をはらんで、強い視線でこちらを見つめてきた。

「優しさが足りないと言っているんだ。あのナオがものを頼んでくれるのだから、もう少し優しく接してもいいじゃないか。これだから人間の男は……」

相手は首を横に振った。それに合わせて、赤みを帯びた鮮やかな茜色の髪が左右に揺れる。肩まで届くセミロングの髪はとても柔らかかに振れ、色の白い肌と絶妙なコントラストを保っていた。

相手の女子の名は、マール＝ファル。その名が示す通り、俺とは国籍が異なる。というか種族も異なる。マールはバルバリ族、通称山の民、の女だ。茜色の髪とネコ科の動物のような頭の上についている三角の耳が特徴的な種族だ。

俺の通う高校は、マルチ・スピーシーズ、他種族共存主義の理念の下、人類とは異なる種族、亜人を受け入れていた。それでも人類

が過半数を占めているが、人類以外にバルバリ族、エルフィン族、デヴウ族といった亜人が通っていた。少数の種族を加えると全部で一〇種類以上にもなる。これだけの数の亜人が通う普通学校はこの国でも珍しく、まして人類と複数の亜人が同じクラスという学校は、おそらくこの学校しかないということだった。

「悪いが俺にはあれが普通の態度だ。要件に対しては的確に対応したつもりだ。批判される理由はないと思うが」

その言葉を聞いて、マールは呆れるような顔を浮かべた。

「その物言いがよくないのだ。理詰めで相手に緊張を強いる。もう少し柔らかい言い方はできないのか」

「あまり改まる必要性を感じていないのだが……、それより」

俺はマールが後ろ手に持っていた教科書に気がついた。
「早乙女の件とは別に、何か目的があつて俺の所に来たんじゃないか」

頭の上の猫のような耳がびくつと動いた。

「よくわかったな。さすが話が早い。実は国語の授業でよく分からない所があつて教えにもらいにきたのだ」

マールはそう言うと、空いていた俺の前の席に座った。バルバリ族の女は総じて小柄で細身でその動作はすばしっこい。跳ねるような椅子に座る際に、制服の短いスカートが翻り、細い太ももが露わになった。俺は軽く視線をそらす。この学校には制服があるが、私服も認められている。クラスにはマール以外にバルバリ族の女が五人いるが、みな白を基調にした種族の衣装を着ているのに対して、マールだけは制服を着ていた。

「ほら、どこを見ている。ここだここ。この主人公の心情とどうか、

そもそもこの小説の意味がわからん」

マールは教科書の一か所を指差し、首をひねっている。俺が了解したわけではないのに、マールはかつてに話を進める。早乙女とは正反対の性格だ。学校が始まって最初の定期テストで俺はマールよりも上の成績だった。それを知って以来、頻繁にマールは勉強のことを俺に聞いて来るようになった。もともとバルバリ族は伝統的に女尊男卑の文化で、男が女の言うことを聞くのは当たり前という風土のようだが。

仕方なく、マールが指差した教科書に視線を移す。それは今授業でやっている内容で、長編小説の一節を抜き出したものだった。

「ここ何が分からないんだ」

「もちろん言葉の意味は分かる。だが、主人公の心情を抜き出せと言われても、書いてあること以外に思い浮かばない」

俺は教科書の一文を読み返した。

「ここは主人公の青年が、ヒロインに想いを寄せながらも、自分と相手の身分を意識し、それを告げられない状況と言うのが背景にある。だからこのセリフも相手を気遣いながらも遠ざけるそんな主人公の気持ちが表れているんだ」

マールは少し黙って、そのセリフとその前後の文脈を熱心に読んでいたが、すぐに顔を上げると、俺に向かって言った。

「なるほど。わからん」

「だから、どこが分からないんだ？」

「そもそも好きだったら好きと言えばいいじゃないか。この男は一体何をやっているんだ。どうせ後で確実に後悔するくらいなら、今、

リスクを取って行動すればいいじゃないか。そもそもこんな情けない男の心情が教科書に載るといふのがそもそも理解できない」

マールは少し怒っているようである。

「種族で考え方の違いというものもあるだろうが、そうした心情を理解するようにするのも、教育の目的の一つなんじゃないか」俺は諭すように言った。「バルバリにはこういう男はいないのか？」

「いないわけではないだろうが、少なくとも感心はされない。バルバリの男は常に勇気を試される。勇気がなくて行動できず、うじうじしている男の話が文学として語られるなんてことはありえないことだ」

なるほど。俺はそう思いながら、バルバリの男に少し同情した。「まあ、それでもこの話の趣旨は分かった。それを踏まえて書けば正答になるのであろう。それならばそんなに難しい話ではない。手間を取らせてすまなかった」

そういつとマールはまた素早く椅子から立ち上がると、自分の席に戻っていった。

俺は正直マールのことをすごいと思っていた。他種族の言葉は人類のものとは異なる。このため、人類社会に入り込もうとすると言葉の壁にぶつかる。しかし、マールは人類の言葉を難なく使いこなしている。下手な人類よりもはるか上というレベルだ。

俺のいるこのクラスは一年A組で、文系の選抜クラスになっていた。このため、入試での学力が上位の者が選抜されているわけであり、皆成績もいい。マールもテストの成績ではかなり上の方に位置していた。マールは普段そんな様子は見せないが、もともと言葉の

ハンデがない人類に比べて、他種族でその成績を取るということは
並大抵の才能と努力ではないのであろう。

その1（後書き）

学園ものにファンタジーを融合してみました。

あまり世界観を混乱させないようにしているつもりです。

ご意見などいただけると参考になりますので、よろしく願いします。

その2

マールとの話が終わると、ほとんど昼休みの終わりの時間だった。といってもどうせいつも席で寝るだけの時間なので、潰れてもどうでもいいのだが。

俺は教室を見回した。少し離れた席では早乙女がエルフィン族の男たちと話している。早乙女はまた何か頼んでいるようだが、エルフィン族はまじめに相手していないようだ。

エルフィン族は通称森の民。このクラスの二割を占める。全部で八人いるエルフィンのうち、七人までが男だった。もともとの学校にエルフィンの女は少なく、指折り数えるほどしかない。男女ともに押し並べて細身で小顔、人類ではありえないほど均整の取れた身体と顔のバランスであり、金髪で容姿端麗だった。

やがて早乙女は諦めたのか、深く頭を下げると、落ち込んだ様子で自分の席に戻っていった。そのすぐ後、エルフィン族の男たちは何やら話しながら笑っていた。

クラスのもう一つの種族であるデヴウ族はクラスの一割を占めていたが、教室には不在だった。いつものように全員連れだってどこかで話でもしているのだろうか。

マルチ・スピーシーズといってもほとんどの生徒は、種族同士で固まっただけで、必要があるときのみ他種族と接触するという程度であった。他種族と普通に話すという者はほとんどいない。例外は早乙女であり、マールであり、そして俺であった。もともと俺の場合は、人類と亜人という区分はなく、ただあるのは自分と他者という区分であり、人類も亜人も隔てなく他者であるという意味において、変わらずに接しているというだけであったが。

五時間目と六時間目の授業はいつもどおり退屈であった。なぜこの程度のことを教えるのに一時間も要するのか、端的に要旨を詰めれば五分で済む話ではないか。そもそも教科書に載っている内容なのだから、それを読んで理解すればいいし、更なる知識が必要なら参考書を読めばいいだけの話ではないか。なぜこんなに時間をかける必要がある、というのが俺が授業中に感じるいつもの思いだった。もっともそういうシステムだから仕方がないというだけの理解も当然にできてはいたが。

そして六時間目はいつものように終わった。そして・・・、

ホームルームが終わり、教科書などをかばんに詰め込んでいた俺は、誰かが近寄ってくることに気がつかなかった。すぐ近くに人影を感じ、顔を上げてみると、そこにはマールが立っていた。いつもとは少し様子が違っていて、珍しく緊張した面持ちだった。「何か用か」と俺が声をかける前にマールの声が響いた。

「私と付き合ってくれ！」

ホームルーム終了時のいつもの喧騒を打ち破るかのような大きな声だった。そして教室を沈黙が覆った。

突然のことで俺には何が起きたのかが分からなかった。

まず、今の言葉を発したのが目の前のマールであるのは間違いない。そして、その言葉が俺に向けられたのも間違いないだろう。マールの印象的な緑の瞳は確実に俺を捉えている。次の俺が考えたのは、言葉の意味だった。マールは他種族であり、まだ、人類の言葉の機微をうまく使いこなしていないので、これもきつと文字通りの

意味であろうと解釈しようとした。もつとも日ごろのマールの言語運用力を考えれば、可能性としてはかなり分が悪いとも思えるが・・。

「えっと、付き合っつて、どこへ？」

もちろん、分かっている。この返しがいかに間の抜けたものであるかを。だが、この場を無事切り抜けるには、これしか思いつかなかった。

マールが急に慌てだした。

「あっ、いや、そういう意味ではなくて、でも確かにそう解釈されるか、やっぱり。しかし、ちゃんと確認したのだが。えっと、私が言いたかったのはそうではなくて・・・」

マールは激しく当惑していた。

俺は自分の選択が間違ったことを悟った。そして、覚悟を決めた。「すまない。今の言い方は卑怯だった。マールが言いたいことが恋人関係になりたいということなら、それはできない」

マールはその言葉を聞くと、戸惑いの表情が浮かんだ。

「なぜだ。私は容姿には自信がある。男が重視するのはそこだろう。それとも私では不満か」

「いや、マールの容姿は間違いなく優れている。少なくとも平均を大きく上回っているのは確かだ。でも付き合うことはできない」

俺は取りつくるために嘘はつかない。これは本心だった。

「他に付き合っている女がいるのか」

「いや、いない」今まで告白されたことは何度かあるが、過去に付き合ったことも今付きあっていることもなかった。

「それでは、やはり私がバルバリ族だからか」マールは視線を落とし、つぶやくように言った。

「それは少しある。お互い価値観が全然異なる。それにも関わらず無理に付き合ってもうまくいくとは思えない。それにそれだけじゃない。そもそも俺たちはお互いのことをよく知らないじゃないか。それでいきなり付き合うなんて無理があるだろう」

それを聞いてマールの表情が明るくなった。

「それならお互いのことをよく知って、価値観を合わせられたら付き合ってくれるということか？」

どうしたらそう都合よく解釈できる？　と思いつつも、俺が言ったことを整理すると確かにそう取る余地もあるように思えた。だが、言葉に拘束されるつもりはなかった。

「未来のことについて約束するつもりはない。だけど、俺は自分の言ったことを覆すつもりはない。もっともそう簡単に種族間の価値観を変えることができないとは思えないが」

俺も人並みの感受性は持っている。この状況の中で女の子に恥をかかせるのは好ましいことではない。だから、話を種族間の価値観ということにすり替えた。ただ、それだけのことだった。

「分かった。その言葉だけで今は十分だ」マールの表情は上気していた。そして、マールは跳ねるように席から離れていき、早乙女の席に行った。

「ナオの言うとおりにした。完全な成功とはいえないが、まあ、出だしとしては上々だろう」話しかけられた早乙女は、笑顔を浮かべていたが、その笑顔が少し引きつっていた。

突然の告白劇はこれで終わりということ、帰り支度をしていた生徒たちの時間も動き出し、それぞれ自宅なり、部活なりに向かっていった。

俺もかばんをつかむとそのまま真っすぐに教室の出入り口に向かった。マールは早乙女と話を続けていた。その表情は明るい。その後ろから、このクラスにいる唯一のバルバリの男が俺のことを睨んでいた。

その3

2

校門を出る際には、クラスの連中が何人か俺に視線を向けてきた。しかし、俺がそっちを見ると、そいつらは慌てて視線を外した。

六月。太陽が無駄に発散するエネルギーが一番強く感じる季節。梅雨入りにはまだ少し早く、空には雲ひとつない。上着のブレザーを着ているため、汗がにじむ。

帰り道、俺はいつものように一人だった。もともと連れだって歩くのが好きではなかったし、他の生徒と話をして面白いと思うこともなかった。

家までは徒歩で二十分の距離。電車やバスを使う生徒も多い中、恵まれた環境にあるといえるだろう。

高校はもともと林であったところを切り開いた丘陵地帯にある。高校の東には南北に走る二車線の通りを挟んで公立の中学校があり、北と西には林が茂っている。南は崖もしくは傾斜の厳しい坂になっており、坂を大きなカーブを描いて通りが走っている。そこを八分ほど歩くと、電車の駅があり、駅を中心に繁華街が広がっている。大方の生徒は行き帰りにその道を通ることになる。

坂を下り、繁華街に至ると、東西に走る大通りが伸びている。通りにそって、スーパードヤ飲食店などが並んでおり、それなりに人も多い。ゲームセンターやカラオケ店など、高校生がよく立ち寄りそうな店も多くあるが、通常、高校の生徒は制服では立ち寄らない。通りには教員も多く出没するため、見つかると反省文、酒を飲んで

いるともなると即停学という重い処分が下るからだ。もっとも俺はそういう所に立ち寄る気はなく、関係のない話だが。

繁華街もそう長く続いているわけではない。大通りに沿って十分も歩くと、商店街は途切れ、住宅街に入る。ここら辺までくると、通りを歩く人の数も減ってくる。

おそらくそこら辺のタイミングを狙っていたのだろう。背後から複数の気配が、不自然な速さで俺に近づいて来る。

やれやれ……。大方予想していた事ではあったが。

「おい」俺の肩に手が載せられる。あまり好意的とは思えない力の強さだった。

振り返ってみると、そこには大柄の男たちが四人立っていた。いずれもバルバリ族の男たちである。皆、帽子をかぶり、特徴である茜色の髪は短くしているようで、帽子のわきから少し見えるだけである。猫のような耳は隠れていて見えない。バルバリの男と女の最大の違いはその体の大きさにある。女がマールのように小柄なのに、対して、男はみな大柄で筋肉質である。俺も百八十センチ近くあり、決して小さくはないのだが、俺の目の前にいるバルバリの男たちは皆それを超えている。

四人のバルバリのうち、一人は見覚えがあった。確か、クラスにいる男のようだ。名前は……。覚えていない。いずれにせよ、バルバリの男は見た目が似通っているので、あまり見分けがつかず、人違いですと言われるても納得せざるを得ない。

「ちょっとこっちに来い」有無を言わせぬ様子の男たちに無理やりに連行され、路地に連れて行かれた。表通りを二回曲がった所にあ

るその路地は、壁には挟まれており、この後起こるであろう展開にとっては申し分のない立地であった。

「お前分かっているんだろうな」男の一人がどすを聞かせた声で言い、俺を睨みつける。一際背が高く、おそらくこれがリーダーだろう。プロレスラー並みの体格と威圧感だ。

「分かっているって何が？」大方の予想はつくが、具体的に目的語を提示してもらわないと、何の事だか断定はできない。しかし、その答えは男たちにとっては、不遜とも思われたのだろう。その態度はさらに硬化したようだ。

リーダーと思われる男が、俺の胸倉をつかんで、壁に押し付けた。かなり強い力だ。逆らっても無駄だろう。

「この状況にも関わらずいい度胸だな。特進クラスのいい頭だから一度言えば分かるだろう。貴様ら人間がマールに手を出すな」

巨体から繰り出される脅し文句にはすごい迫力がある。普通の人間なら漏らしてしまうかもしれない。だが、俺はそんな繊細な感受性は持ち合わせていなかった。

「俺は手なんて出してない。マールの方が付き合いたいと言ってきて、俺は断った。なあ、あんたその場にいただろう。その通りだよな」

俺はリーダーの後ろにいる、推定クラスメイトの男に話しかけた。話しかけられたバルバリの男は、その図体に似合わないような当惑した表情を浮かべた。

リーダーはそんなクラスメイトの様子を一瞥して舌打ちすると、

また、俺の方を向いた。

「うるせえ。そんなことはどうでもいいんだよ。金輪際マイルには近づくな」

要は嫉妬か、と思ったが、それを口にして状況を悪化させるほど馬鹿ではない。残りの三人のバルバリの男たちも強い眼光で俺を睨んでいる。こういう状況に置かれると、自分が何かとても悪いことをしたのではないかという感覚に陥る。周りから作用を受けやすい人の主体的意識というものがいかに脆弱な基盤の上に成り立っているものか。

「分かった。言うとおりにしよう。同じクラスだから全く近づかないというのは無理だと思うが、できるだけ努力はしよう。だけど、マイルが勝手に近づいてくるのは適用範囲外としてほしい。それでどうだ」

俺としては最も現実的かつ合理的な妥結案のつもりだった。しかし、目の前の男がみるみる顔を、おそらく怒りと思われる感情で赤くしていくのを見ると、その妥結案は否決されたい。だから異種間交流は難しい。

その4 (前書き)

その4

バルバリ族という名称は、英語で言うところのバーバリアン、つまり野蛮なという意味からきている。バルバリ族は自らの言語で自分たちをそう呼んでいるわけではないが、人類の言語で彼らを呼ぶ場合の呼称として定着している。マールに関して言えば、そうした本来の意味とはかけ離れた存在のようにも思えるが、今、俺の目の前で怒りの形相で迫ってくる大男たちを見れば、昔の人類がそのように名付けたことも分からなくもない。

「てめえ、俺たちをなめているだろう」

男はそう言うと、もっとも原始的かつ効果的な手段に訴えた。暴力である。

男は俺の胸倉をつかんでいた手を離れた。俺は一瞬身体の自由を取り戻したが、次の瞬間、男の太い腕から繰り出されたボディープローが腹を襲った。避けるにはあまりに至近で男の動きも速かった。しかし、それは多少手加減されていたようにも思う。もし、この大男が本気で相手を殴れば、内臓が破裂してもおかしくはないだろう。そこはさすがに心得ているようだった。

しかし、それは始まりでしかなかった。前のめりになった俺の背中に衝撃の固まりがぶつけられた。目視していないので自信はないが、右ストレートが入ったのだろう。物理的な衝撃に耐えられず、俺の身体は地面に倒れ込む。次に顔に蹴り、さらに腹に蹴り、倒れた相手には蹴りが最も効果的なのは自明であるが、それが何回も繰り返される。

リーダーの男だけじゃなく、他のバルバリの男もそれに加わったらしい。やたらと足の数が多い。小学生の頃、校庭でサッカーをして遊んでいる子供たちが、一つのボールに群がっているような情景があるが、俺の状態はまさにそのサッカーボールのようだ。身体が繰り返し蹴られる。手加減はしても容赦はしないらしい。

あまり鏡を見たくないな。傷でもできると目立つので、なるべく顔は腕で覆うようにした。しかし、体はあざだらけになっているだろう。制服もぼろぼろになってそうだ。まずいな、これじゃあ、あとでおばさんに怒られる。

そんなのが五分も続いただろうか。男たちの息が切れている。俺は相変わらず地面に倒れたままだ。

「いいか、これにこりたら、二度となめたまねすんじゃねえぞ」男は息を切らせながらそう言った。そしてバルバリの男たちは立ち去っていった。

後には倒れた俺が残された。

目を閉じて体の被害状況を感じてみる。少なくとも内臓には損傷がない。骨も大丈夫だ。多少皮膚が切れているが大したことはないだろう。出血も部分的であり、見た目はともかく、動く分には問題はなさそうだ。

俺はそう判断すると、ゆっくりと立ち上がった。

「まずはこの恰好だな」制服のブレザーはところどころ破れていた。蹴られたせいで、だいぶ汚れてもいる。ズボンも汚れてはいたが損傷はなさそうだ。ワイシャツは破れてはいないが、鼻血がついてい

て、かなり目立つ。かといつてもどうにもごまかしようもないか・
。

俺は仕方なく、そのままの格好で家に向かうことにした。どうせここから五分くらいの距離だし、繁華街はすでに超えているので、そんなに人通りも多くない。それほど目立つこともないだろう。

俺は歩き出した。ふとももを強く蹴られて多少筋肉に損傷があるようだが、歩くにはそれほど支障はない。多少、足を引きずるようになるが、明日には元に戻っているだろう。

俺はバルバリを恨む気持ちはなかった。俺はタブーを破ろうとしていた。例えそれが俺の望んだことではないとしても。

異種族間の恋愛をしてはいけないという明文上の決まりもなければ、それを声高に言う者もない。たまに異種族間で結婚する者もいる。ただ、それはごく例外だ。実際にはそれぞれの種族は他種族に対して見えない壁を持っている。特に人類社会の中で暮らす亜人はその傾向が顕著であり、人類とは友好的なバルバリ族と言えどもそれは例外ではない。

マルチ・スピーシーズなどきれいごとを言っつて、学校で仲良しごっこをやったからといって、その前提が消えるわけではない。暗黙の決まりを破ったものは制裁を受ける。だから、俺は抵抗をしなかった。ただ喜ぶべきは、それを受けるのがマイルではなかったということだ。もしマイルが何らかの制裁を受けるのであれば、俺はその相手に対しては容赦をしないだろう。

俺は表通りに戻ると、家に向かって歩き出した。途中、すれ違う人々が俺に奇異の目を向ける。こういう日に限って、いつもより人

通りが多い。いや、それは気のせいなのかもしれないが、そんな視線を向けられるほど、見た目ひどい状況なのかな。家で鏡を見るのが怖い。いや、それよりもおばさんや美奈の反応の方が怖い。

そうやく家の前に通じる通りに至った。大通りを曲がると、人通りは少なくなる。ここからは一分だ。

距離は短いが、ここからすれ違う人は知り合い率が高いので注意が必要だ。もつとも注意したところで状況が変わるわけではないのだが……。

幸いにして知り合いとすれ違うこともなく、俺は無事目的地、家に辿り着いた。俺の心境はまるで、RPGでレベルが低いのにも関わらず無理して遠征して、強いモンスターからひたすら逃げる逃げるを選択し、HPぎりぎり、MPも薬草も枯渇し、あと一回モンスターにエンカウトして、逃げる 回り込まれた!、となったら即死という状態ながらも、ようやく次の街に辿り着いたキャラといったところか。

通常、この時間ならまだおばさんも美奈も戻ってはいないはずだった。勝算はある。俺はかばんに手を入れると、外ポケットから鍵を取り出し、鍵穴に差し込み鍵を解除した。

そしてドアを開けると、そこには……。

美奈が立っていた。仁王立ちとはこのことだろうか。ちなみに美奈は同居のいとこである。ゆえあって俺は父親の姉の家、つまり叔母に預けられている。美奈はその叔母の娘でつまり俺のいとこ、年は俺が半年ばかり上のため、美奈からは、おにいちゃんと呼ばれているが、民法の家族法上、まぎれもない四親等のいとこである。ちなみにクラスこそ違うが、同じ高校の同学年であるため、さらに話

はいろいろとややこしい。

すべての望みは潰えた。そう、それはぎりぎりの状態でようやく街に辿り着いてホッとしていたら、入口の所に敵キャラが立っていて、強制的に戦闘画面に移行してしまったかのような・・・。

その5

「おにいちゃ〜ん！ 聞いた〜よ〜！！ バルバリの女に告白されたんだってえ〜！！！」美奈のその目は怒りに燃えていた。その理由は俺には分からない。これまでの行動の中で、同居しているところに怒りを向けられる理由があったであろうか、いや、ないであろう（反語）。

美奈はC組の生徒で、バスケットボール部に所属しているが、背は女子の平均といったところであろう。一年ながらもレギュラーである。邪魔にならないようにと髪はショートにし、普段はあまり化粧気もないが、運動しているだけあって、スレンダーな体形で、均整の取れたその容姿は、ボーイッシュとも呼べるものであったが、男子とそして一部の女子生徒にも人気があった。

怒りのテンプレ的な反応を示していた美奈であったが、俺の見た目ぼろぼろの様子に気がつくのと、とたんに態度を豹変させた。その表情は怒りから驚き、そして心配へと変わっていった。

「・・・どうしたの、その格好・・・」

「途中で、山猫の群れに襲われて、動物愛護をモットーとする俺としては、手を出さずに奴らの好きなようにやらせたわけさ」

俺としては適当にごまかしたつもりだったが、この微妙な比喻によって、美奈に経過が正確に伝わってしまったらしい。

「・・・バルバリにやられたんだね」美奈は普段、とても心根の優しい女の子である。なればこそ、怒らせると怖いその性質に火がついてしまったようだ。

「頼むからお前まで当事者になるのはやめてくれ。話がややこしくなるから。それに見た目こそひどい状況かもしれないが、実際には大したことはないから」そう言う俺は手足を動かして健在ぶりをアピールした。

「本当に大丈夫なの」美奈が目にも憂いをたたえながら、俺に近づいて来る。そういう目で見つめられると弱い。美奈はまだ制服姿であり、その制服が汚れないように俺は美奈を押しとどめた。

「大丈夫だよ。全く問題ない。だから美奈もこのことはおばさんには言わないでくれ」

叔母の家に居候している身としてはとても立場が弱い。美奈は少しの間、俺の事を見ていたが、「うん。おにいちゃんがそう言うのなら・・・」そう言うって、美奈は後ろを向くと、廊下を走り居間に入ってしまった。

俺はほっとした。とりあえず当面の危機は回避された・・・。

美奈はすぐに居間から出てきた。手に四角く白い箱を持って。

「治療しなきゃ」そういうと美奈は箱からガーゼと消毒剤を取り出した。

「・・・とりあえず、服脱いでよ」美奈は少し視線をそらして言った。さすがに叔母とその娘、女家族の中に居候させてもらっているので、普段から家の中でパンツ一丁ということはなく、上半身裸という状況もほとんどない。このため、美奈の前で脱ぐのはとまどいもあったが、今の状況で躊躇するのも逆に不自然かとも思えたので、俺は玄関に座り上着、そしてシャツを脱いだ。

俺は細身だが、それなりに筋肉もついている。美奈は隣に座り、少し顔を赤らめながらも、上半身のあざの部分を消毒液のついたガーゼで優しく拭いてくれる。

「しみない？」美奈が上目づかいに俺の顔を見て聞いた。

「大丈夫だよ」多少しみる感覚はあったが問題のないレベルだった。

まあ、とりあえず治療の必要はないのだけだな……。俺はそう思いながらも美奈の好きなようにさせた。人の行為を無にするような野暮な性格ではない。願わくは玄関先でそうこうしている内に、おばさんが帰ってこないことを祈るのみであった。

美奈は慣れない手つきで傷口を消毒すると、次にガーゼを張り付けてくれた。美奈の顔が俺の体のすぐ近くにあるので、温かい息が背中に触れる。

そんなこんなで美奈の治療も終わった。美奈はまだ何か言いたげのようだったが、その様子に気がつかないふりをして、とりあえず治療の礼を言うと、脱いだシャツと上着を手に取って、階段を上がった。そして、ようやく自分の部屋に辿り着くことができた。別に部屋に鍵がついているわけでもないのだが、安全地帯に辿り着いた気持である。

さて……、

制服については、ブレザーの上着はところどころ破れていて修復不可能といった感じだった。だが、もう夏服「ワイシャツのみで登校OK期間であるので、しばらくは大丈夫だろう。そのうち、貯金をはたいて上着を新調する必要があるだろうが。

ズボンについてはだいぶ汚れていたが、破れなどがあるわけじゃないので、クリーニングに出せば問題ないだろう。夏服用の生地が薄いものがあり、そちらで代替も可能だ。

ワイシャツについては、鼻血がつき、水で洗っても落ちそうになり。これは破棄しないとだめだろう。もちろん代えの物がいくつあるのか、どうにかはなる。俺の思考がそこまで至ったところだった。

「なんか、ぶざまにやられちゃったね」

とてもやる気のなさそうなトーンで話しかけてくる声があった。俺はそちらを見ることもなくその声の主に対して言った。

「いつから、いた？」

「うんとね」。相馬隼人がバルバリに、ぼこぼこにやられているところからかな」

「だったら助けを呼ぶとか、他に選択肢もあったと思うが・・・」

「うん。それも考えたけど、とりあえず刃物とか出すって感じじゃなかったし、それなら変に騒ぎになるよりは傍観した方がいいかなって思ってる。あの程度なら、相馬、大したことないでしょ」

「まあ、それはそうだが・・・」

俺はベッドに横たわった。仰向けになった俺の目線の先、部屋の天井付近に、身長一五センチほどの物体が浮遊していた。それは亜

人と呼ぶにはあまりに人から離れた存在、その大きさもそうだが、背中には透明なトンボのような羽を持ち、亜人には不可能な飛行というスキルを持った種族、フェリー族。そして、今俺の目の前にいるのは、フェリー族の女、ラウフだった。

その6

フェリー族は、身体こそ小さいが、その知性や姿形は人と大差ない。見た目はエルフィン族のように均整の取れた容姿であり、今目の前にいるラウフも金色の髪に青い瞳、まるで人形のような姿恰好をしていた。そして背中には身長よりも長い羽が、ホバリングを可能にしていた。

「治療する必要ないよね？」ラウフは言った。最低限の義務は果たすといったところであろうか。

「いや、必要ない」俺は強がりでなくそう言った。

俺はベッドに横になりながら、目を閉じると、意識を集中させた。自らの傷に感覚を移す。そして、そこに向けて、生脈を向けた。

人類と亜人の最大の違いは、生脈を使えるかどうかであった。生脈とは体に流れるエネルギーであり、すべての生物に備わっているものである。ある地域ではそれはクンダリニーと呼び、また、ある地域ではそれを氣と呼ぶ。一部の亜人はその生脈の力を使い、力を強くしたり、けがや病気の治療を行うことができる。しかし、人類はその力が先天的に弱く、ごく一部の者を除くと使うことはできない。だが、俺は人類の中でも例外的な存在であった。

バルバリにやられている時には生脈を体に向け、皮膚や筋肉を強化していたので、深刻な傷はなかった。軽微な傷なら生脈で治療できる。

「それにしても、もてる男はつらいね」

俺の意識の集中を妨げるようにラウフは話しかけてくる。俺はと
りあえず無視するが、さらにラウフは俺に近づいてくる。特にその
羽音が耳ざわりだった。

俺は目を開けると、すばやく起き上がり、近づいてきたラウフを
捕まえようとした。しかし、ラウフはすばやく上昇し、俺の手を逃
れた。そしてあかんべえをしながら言った。

「捕まらないよ〜だ」

ガキかこいつは。フェリー族はいたずら好きで気まぐれ、近くに
いると苛立つことが多い。俺が子供の頃、親父が何の因果かこいつ
を俺の遊び相手として連れてきて、それから7、8年が経つ。今で
はうっとおしくてたまらない。

俺はまた横になると、意識を集中させた。目を閉じていてもその
羽音からラウフが少しずつ近づいてきていることが分かる。

「相馬には美奈ちゃんがいるのに、今度はバルバリに手を出したの
かい。そういえば学級委員長ちゃんもメロメロっていう話じゃない
か。ああ、すばらしい青春の謳歌だね〜。何股もかけて刺されない
ように注意しなよ〜」

ラウフはわざと俺を怒らせるようなことを言う。羽を釘で壁に打
ち付けて、オブジェとして飾ってやるうかという気持ちにさせる。
しかし、俺はその言葉に対し、直接的には反応しなかった。

「相馬ちゃん。起きているのは分かっているよ〜。タヌキ寝入り
なんてしても無駄だよ〜」

俺はまた眼を開けると、すばやく体を起こし、手を飛ばした。しかし、ラウフは間髪一髪俺の手をかわし、慌てて天井付近まで逃げる。「捕まらないよ〜って言っているじゃない。無駄な努力、御苦労さま〜」

しかし、ラウフが油断した隙を狙って、俺はベッドと壁の隙間に置いておいた虫とり網を手にとって、すばやくそれを振った。ラウフが無事網に入った。

「フェイントとは卑怯なり〜」

俺は網の中でもがきながら「ごちゃごちゃ言っているラウフを無視して、部屋の窓を全開にした。

「しばらく戻ってくるな。5年でも10年でも」

俺は虫取り網の先を窓の外に出し、それを大きく振った。勢いでラウフが遠くに飛んでいったのを確認すると、すばやく窓を閉め、さらにカーテンも閉めた。ちなみに俺はこの年にもなって、虫とり網をもってカブトムシを捕まえにいくという趣味はない。ラウフを捕まえるために、この前、近所の雑貨屋で購入したものだ。

俺はまたベッドに横になり、意識を集中させる。しばらくすると窓をたたく音がしたが、もちろん無視した。

再び傷口に意識を集中させる。全身の生脈が流れていくのを感じる。傷自体はそんなに大したことはない。10分も意識を集中すれば、あらかた傷はふさがり、後は自然治癒で寝ている時に治るだろ

う。

ほとんどの人類は生脈を使えず、特別な訓練を積んだ一部の者だけがそれを使うことができる。しかし、俺は特別な訓練などではないが、使うことができた。それは俺が亜人の一種族であるモルス族の血を引いているからである。

二〇年前、この国から海を隔てた所にある大陸で、一つの戦争が終結した。それは後に最終戦争と呼ばれるものであり、人類と亜人による大陸の覇権をかけた全面戦争であった。亜人の中でも、バルバリは人類につき、エルフィンなどは中立を守ったが、そのほかの百を超える種族の大部分が連合を組み、大陸奥深くへと侵攻してきた人類と戦った。

もともと大陸には人類と多くの亜人が住んでいた。戦争の理由は、大陸の高山地帯に眠る資源確保であり、人類の居留地を守るという安全の確保であり、有史以来続く人類と亜人の相互不信であり、そうした諸々の事情が蓄積した結果、発生した衝突であった。

亜人は種族間で協力し、生脈を駆使して人類に立ち向かった、しかし、人類は圧倒的な量の近代兵器を投入し、空と陸から大々的に攻撃を行った。亜人の住んでいたある村は一つの爆弾のためにあとかたもなく消え去り、ある山は戦闘機の爆撃により一本の木すら残らなかった。

人類の攻勢は、大陸の西へ南へ北へと広がっていった。しかし、快進撃を続ける人類の前に一つの種族が立ちはだかった。それはその時にはまだその存在が世に知られず、山の奥地でひっそりと暮ら

している少数の種族であった。その種族は生脈による幻術を用いた。それは他の亜人とは全く次元が異なるほどの強い力だった。

大陸の北方面へ進んでいた人類の第四師団は、その幻術により正気を失うものが続出し、兵の逃亡や部隊内での殺人が頻繁した。前線でも幻影のために前進を阻まれ、補給もしばしば混乱に陥った。やがて混乱に乗じた亜人の総反攻を受けて、第四師団は撤退を余儀なくされた。その後には何十万もの屍が残された。

一つの方面の敗北は多方面へも影響を与える。この敗北がきっかけとなり、人類と亜人で講和会議が開催され、やがて休戦に至った。

休戦後、謎の種族はまた大陸の奥深くに戻り、人類の前にはその姿を現れなかった。戦場で彼らに相對して生きているものはほとんどいない。だが、そのわずかな可能性をくぐりぬけてかろうじて生還した兵士は、彼らの印象について口をそろえて言った。

化け物と。

人類はその種族のことを、恐怖と憎悪と怨嗟の気持ちから、モルス族、死の民と呼んだ。

俺は、美奈がガーゼを貼ってくれた腕の傷に意識を向けてみた。その傷はふさがりつつある。人類では考えられない再生力である。

俺の体には死の民の血が流れている。細かい経緯は分からないが、父は人類、母がモルス族であるとのことだ。俺は母親の顔を見たことがない。どんな恐ろしい顔をしているのか、想像しただけでも笑

えてくる。

俺にモルスの血が流れていることは、父親と叔母、そしてラウフしか知らない。見た目は完全に人類であるので、今まで問題になりかけたこともないが、モルスは今でも第一級警戒種族である。血筋のことがばれたら、のんきに学校になんか通っていることはできなくなるだろう。戦争で死んだ人の遺族から憎しみを向けられ迫害されるか、あるいは、謎のモルス族の貴重なサンプルとして珍重されるかもしれない。監視と拘束の下で。

ちなみに俺の父はいまだに大陸で停戦監視をしており、故郷であるこの島国にはめったに戻ってこない。母の存在は分からない。生きているか死んでいるかも不明だ。父も一時は母と共に住んでいたこともあったようだ。やがて離れ離れになり、その後、連絡することもできないとのことだった。残されたのは、血ぬられた種族の血を引く忌見である俺だけだった。

異種族間でなんて、そんなのうまくいくわけがない。

その6（後書き）

第1章は終わりです。

ようやく、俺TUEEE展開につながっていく舞台が揃いました。
感想などお聞かせいただけますとありがたく思います。

その1

第2章 かすかな光

1

翌日、起きてみると体のことが気になった。痛みはなかったが、服を脱いで自分の身体を鏡に写してみた。昨日美奈から治療を受けた大仰なガーゼや絆創膏を取ると、あざはほとんど消えていた。

制服に着替えて、二階の寝室から一階のリビングに降りると、すでにそこにはおばさんの姿も美奈の姿もなかった。机には一人分の朝食と弁当箱が置かれていた。

おばさんは毎日朝早く出かけ、夕方五時過ぎには買い物を終えて帰宅する。美奈はいつものバスケット部の朝連だろう。正直、美奈がいなくて少しほっとした。昨日の夜はおばさんがいたので、美奈は約束を守ってけがのことには触れないでいてくれたが、二人きりだと、また、詮索されかねない。

俺はパンをトースターにかけると、テレビをつけた。公共放送のニュースだ。

テレビ画面では国際ニュースを放映していた。大陸において、諸国連合の治安維持部隊が異種族からと思われるテロ攻撃を受けて、八人が死傷したというものだった。それ自体珍しいニュースではない。治安維持部隊は年間二〇〇人以上がテロや襲撃により死亡している。報道はされないが、治安維持部隊の攻撃により死亡した異種族の数はそれを上回っているだろう。

大陸における大戦が終了し、人類と異種族間で講和が結ばれた。しかし、それで万事すべて終了とはいかない。異種族の中には人類に対して深い憎悪を持つ者も少なくないし、その逆も当然多く存在する。そのため局地的な紛争やテロ活動は断続的に発生している。

ちなみに俺の親父も治安維持部隊だが、親父がテロに巻き込まれたとは思わない。あの親父がテロくらいで死んだりするものか。

大陸から離れたこの島国でも、大戦の直接的な影響はなかったのにも関わらず、異種族を嫌い、排除しようとする輩は少なくない。異質な存在、特にそれがあつた程度の規模を超えようとすると、とたんに拒否反応が強くなる。自分たちが築いてきた領域を侵されようとすると、それは恐れと嫌悪を生む。マルチ・スピーシーズにより多くの亜人を受け入れている俺の高校に対しても、有形無形の嫌がらせがあるらしい。

治安維持部隊の死傷者のニュースは、発生した事実を淡々と告げるとそれだけで終わった。テレビ画面は次のコーナーに変わり、地方の名産品の紹介のコーナーになった。そのトーンも変わり、先程深刻そうな表情でニュースを読んでいたキャスターが今度は笑いながら、大きく育った野菜を抱えた中継先のレポーターとのやり取りをしている。

所詮、治安維持部隊の死など織り込み済みの事象でしかない。かつてどこぞの独裁国家の高官が言ったそうだ。「一人の死は悲劇だが、集団の死は統計でしかない」と。言い得て妙だと思う。個人の死が取りざたされるとき、その死は、その人の人生やその人を取り巻く人たちと結びつき、個別具体の感情を呼び起こし、それは悲劇となる。死はそれを受け取る側にもリアルな感覚として、自らの生

死とも関連させながら、確かな実感として伝わる。しかし、人の死が数字で示されるとき、それはただの抽象的な事実として存在するのみである。もっとも、その独裁国家の高官は自ら率先してある人種の殲滅を図ったそうで、殺される側からしてみたら、「お前が言うな」といった心境であろうが。

俺は朝食を終えると、身だしなみを整えた。制服の上着はぼろぼろになっているので着れないが、もう夏服でもオーケーな調整期間であるので、上着を着てなくても問題はないはずだ。

外に出ると、朝にも関わらず強い日差しが体に突き刺さる。今日も雲ひとつない青空だった。

いつもの通学路、校門を抜ける生徒の群れ、変わらない教室と決まった席。

すでに生徒の多くが登校しており、いつもどおり、人は人、バルバリはバルバリ、エルフィン、エルフィンはエルフィン、デヴィはデヴィで固まっている。そう、それはいつも通りの情景のはずだった。

しかし、今、俺の席の前には人とは違う種族の女が立っていた。バルバリの女の子、マールだった。

いつもの元気印、明るい自信に満ちた表情とは異なり、今日は何かを堪えるかのような重い表情だった。

「相馬、昨日のこと、聞いた」

俺が席に着く前。挨拶をする前に口を開いたのはマールだった。

「ダイサたちのこと……、本当にすまない」そう言うとマールは深

く頭を下げた。それは早乙女もかくやというほどの見事な礼だった。

ダイサ？ その固有名詞には聞き覚えがあるような気はした。状況から推測すると……。そうだ。このクラスのバルバリの男がそんな名前だった。

教室を見渡すと、茜色の髪の大男が少し離れた席からこちらを見ていることに気がついた。その表情は怒りと、戸惑いの気持ちが混ざっているように思えた。

頭を上げたマールの瞳は憂いの色にあふれていた。

「けがは、大丈夫なのか？」

「別に大したことはない。見た目にもけがなどないだろう」

「それは……、確かに」マールは少しだけほっとしたような表情を浮かべた。

「本当にすまないと思っている。私が勝手にやったことなのに、こんなことになるなんて。昨日帰り道でダイサたちとすれ違った。私のことをみると、急におどおどしたので問い詰めてみたら、相馬に、その、ひどいことをしたと。すぐにその場所に行ってみたら、そこにはもう相馬はいなかった。なんてお詫びしたらいいか分からない」そう言ってマールは目を伏せた。頭の上の耳もいつもより元気がないように見えた。

「だから気にする必要はない。俺はこのとおりピンピンしている。マールが気に病む必要はない」

「すまない。この期に及んで気遣いをしてくれる相馬のその優しさには、感謝のしようもない」マールは俺の顔を見上げると、また、

下を向いた。そして、その肩が少し震えだした。

その2

「それにしてもあいつら・・・」マールはそう言うと、後ろを素早く振り向いた。その視線の先にはダイサがいた。

「ダイサ。すぐにほかの連中も連れて来い！ 今すぐにだ！！」

言われたダイサはその巨体に似合わず、慌てふためいて、すぐに教室を飛び出していった。バルバリ族が女尊男卑というのは本当らしい。

数分後、ダイサが同じような巨体のバルバリの男三人を伴って戻ってきた。大男のグループ登場に、進路上にいた生徒が慌てて道を開ける。

「みんな、ここに並んで、相馬に謝れ」

マールの号令の基に、四人のバルバリの男たちが俺の前に横に並んだ。立ち並ぶその顔は確かに昨日の連中のように思える。男たちは苦渋に満ちた表情で俺を睨んでいたが、マールには逆らえないらしく、素直に頭を下げた。小柄なマールがごっつい大男たちを意のままに操る情景はシニールだった。

当然、その情景にクラス中の生徒の注目が集まるが、それについては触れたくない。

「よし！ 次にもう二度と相馬に手を出さないと誓え」さらにマールの号令がかかる。

男たちは戸惑っていたが、マールに睨みつけられると、巨体を小

さくして、一人ずつ、もう手を出しませんと、小さな声で言った。

マールは俺の方を向いて言った。

「相馬、こんなことで許させるとは思わないが、バルバリ族は嘘をつかない。今こいつらは約束したので、それを違えることはない」

「分かった。もう十分だ。これ以上はもう必要ない」

マールはその言葉を聞くと、バルバリの男たちを解散させた。男たちも内心は複雑なのであろうが、一応に席から離れていった。俺はひそかに彼らに同情した。

マールは立ち去る彼らを一顧だにせず、再び俺を見上げた。

「本当に今回のことはすまなかった。もし、相馬の気が済むのなら何でもする。言ってくれ」

「だからもういいって言っている。別にマールが悪いなんて少しも思っていない。それよりホームルームが始まる。もう席に戻ってくれないか」

その言葉をマールは拒絶と捉えたのだろうか。マールは気落ちした様子で「分かった」と言うので席に戻っていった。

バルバリ族は嘘をつかない種族だ。彼らの独特の倫理観がそうさせているらしい。しかし、そうした性質ゆえに、バルバリ族は優れた特性を持ちながらも、長い歴史の中で人類に従属を強いられることが多かった。嘘をつけない種族よりも、平気で嘘をつける、相手をだませる、裏切れる種族の方が強い。これは理不尽だが自明なことだった。

その後すぐにチャイムが鳴り、その後担任がやってきた。出席の確認をし、その後、退屈な授業が繰り返される。また、いつもの日常の始まりだった。昨日は日常から少し離れた一日だった。今日は退屈でもいいから、またいつもの日常に戻ってもらいたかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1482ba/>

クラスに異種族が普通にいたらどうなるかに関しての一考察

2012年1月14日09時46分発行